

# 2015年度の活動を振り返って

ホーチミン日本商工会会長

## 坂上 勉



ホーチミン日本商工会は、ここ数年、毎年100社程度の新規入会があり、遠からず1,000社に到達することでしょう。そのような大きな組織になったときにも、商工会が十全に機能できるよう本年度は「ドイモイ（刷新）」をテーマに活動を行ってきました。その時のポイントは、従来のような「属人的な運営」から「組織的な運営」に脱皮すること、ピラミッド型、縦型の組織に作り変えることです。

これらの改革を進めていくにあたっては、毎月1回、実行委員会の委員長が集まって行われる執行委員会ですっかり議論をするようにしました。当初、委員会の時間は1時間半でしたが2時間半に延長。それでも終了予定時刻の18時半には終わらず、19時過ぎまで白熱した議論が続くことがしばしばでした。自身が担当する委員会以外の議論にも積極的に参加を促し、従来以上に時間は掛かりましたが、執行委員会が本当の意味で議論の場になったといえるでしょう。

では何が変わったのか、ドイモイができたか、具体的な例をあげましょう。まずは一つ一つの委員会活動の中身を、各委員長主導の下、見直していきました。中でも大きく変わったのは社会貢献委員会でしょう。ここでは「JBAHとして、どのような方法で寄付金を集め、どのような方法でベトナム社会に貢献するのが最善なのか」を、ゼロから検討し直しました。

2014年度までは、会員の皆様から寄せられた寄付金をSAPP（ホーチミン貧困障害者援助協会）という団体に現金で全額贈呈してきました。しかし、本年度はそれを見直しました。

1つは日本語教師の育成支援講座の開設です。当地の日本語教育のレベルが上がることは、我々日本企業にとっても嬉しいことです。まさにJBAHならではの用途だと言えるでしょう。

もう1つは、児童養護施設および老人福祉施設への物資の贈呈です。それも単に物を買って届けるだけではなく、私や事務局スタッフ、社会貢献委員など、我々自身が現場に品物を持ち込み、手渡すようにしたのです。「双方の顔が見える」支援活動ができたと感じています。

こういった動きは、もちろん社会貢献委員会だけではありません。すべての委員会において、「これまでの実績を尊重しつつ、活動の目的と方法を根本から見直す」ことを行いました。これは来年度以降にも引き継がれていくことでしょう。

次に部会活動について見てみましょう。部会には「会員相互間の懇親」と「事業環境改善」という大きな2つの役割があります。この事業環境改善をより効果的に進めるために、本年度後半には工業部会を地域別に再編しました。これにより各部会と、所在地域の人民委員会など行政機関との関係が緊密になり、事業環境の改善活動がやりやすくなるだろうと期待しています。

こういった商工会の活動を、会員企業の皆さんをはじめ、非会員企業の方々、在住日本人の方々、それからベトナムの方々にとって頂くことも大切です。そのため会長である私自身、各メディアからの取材依頼には、積極的に対応するようになってきました。その結果、本年度、商工会活動がメディアに取り上げられた回数が、これまでで最多であったことは間違いのないでしょう。

本年度、役員の方々には、いろいろ無理難題を申し上げることもあったかと思いますが、「会員数1,000社時代」に向けて、一緒に改革に取り組んで頂いたこと、心より感謝しております。そして中嶋総領事および総領事館の皆様には、今年も商工会活動へ変わらぬご理解とご支援を頂きましたこと、この場を借りて御礼を申し上げます。1年間、有難うございました。